（研究論文）

若年性認知症の事例研究

藤本　文朗

A Case Study of Presnile Dementia

Bunro Fujimoto

要約

この数年、家族ぐるみで交際のある富田秀信さんの奥さんである富田千代野さんは、8年前に若年性認知症（当時49歳）となった。以後、夫の秀信さんは仕事と介護の綱渡りをしながら家族介護をし、地域のネットワークに支えられてきた。

本論文では、これらの介護に支えられる中で、千代野さんの発達を、心理テストなど施行しつつ分析した。その結果、千代野さんの発達とともに、地域の発達も認められた。

キーワード：若年性認知症　介護　発達

2004年10月14日受理

1、はじめに

この夏（2004年）に、富田秀信編著『子どもになった母さん―仕事と妻の介護は綱渡り』が発行された。

この著(注1)は、富田秀信さんの妻の富田千代野さんが8年前の4月19日発病し、若年性認知症になってからの、夫富田秀信さんの仕事をもちながらの在宅介護を、エピソード風に描いたものである。研究的にみてもこの著は優れた実践書である。

本論文では、この富田千代野さん（以下、千代野さんと記す）を事例研究として取り上げる。この千代野さんを、事例研究として取り上げた理由は、以下の点からである。

①私自身、千代野さんの夫富田秀信氏とは数年来の友人で、旅行社に勤められているので、お世話になったことをきっかけに、日本ベトナム友好協会の会員同志でもあり、これらの活動で、奥さんの千代野さんともよく接するので、クライエントということだけでなく、日常的情報も得やすい。

②千代野さんは、49歳の発病であり、若年性認知症である。高齢者（65歳以上）の認知症に比べて福祉制度の上でも谷間であるが、研究面でも未開拓の分野である。

③千代野さんは、いうなれば中途障害者であり、49歳までは健常者であり、夫富田秀信さんは、前後の変化や回復、発達を身近に見て、比較できる立場で多くのデーターを持っている。それらを総合的にみたのが、前述の本のタイトル『子どもになった母さん』に代表されている。即ち、記憶や認知だけの中途障害の面だけでなく、性格の面での障害が認められるが、「子ども」らしさに示される人間の基本的発達は保持されている。

以上が千代野さんを事例研究として取り上げ

る理由である。

事例研究への視点としては、総合的にこの事例を見るといえるが、とりわけ、1）発達　2）ロールシャッハ・テスト（Rorschach test）など、心理テストの結果　3）千代野さんの生活と周り、家庭や地域づくりと千代野さんの発達などに焦点をあて、分析する。

2.千代野さんの生い立ち、発病、発達、障害

①生い立ち

1947年2月16日、京都府丹後町間入町（たいざちょう）で生まれ、6人兄弟姉妹の4番目として育ち、丹後の海の子として自然にも恵まれた環境で育った。地元の小中高に通い、高校卒業後、京都市内に出て民間の保母（保育士）となった（1952）。1974年、富田秀信さんと結婚、共働きで3人の子ども（1976年長男、1979年次男、1984年長女）を育てた。共働きの夫婦であったので、家事分担は夫である秀信さんと行った。食事の後片付け、洗濯、朝の子どもの保育園への送りといったところが夫の分担という民主的な家庭づくりの実績があった。しかし、妻の千代野さんが38歳の時に体力的な理由（高血圧など）で保育園を退職し、体力回復に努める一方、学童保育の指導員を始めたりした。

②発病

妻の千代野さんが49歳になった1996年4月19日、自宅で倒れているのを帰宅した長女が発見した。救急車で搬送したその結果、心臓発作による無酸素脳症にて、高次機能障害（若年性認知症）を起こしていることが判明した。

発病直後は生死の境をさまよい、家族は死を覚悟したこともあった。幸い生命は取りとめたが、記憶障害などが残り、理学療法（PT）作業療法（OT）言語療法（ST）などのリハビリテーションを受けた。4つの病院を転院するも「病院治療の意味はない」と言われ、余儀なく退院させられた。1997年9月より、在宅介護を開始するも、介護保険が発足する以前で、中途障害者は通所施設がない京都市の現状があった。制度的にみても福祉の谷間におかれていた。2000年の介護保険導入まで何とか、ボランティアと施設の柔軟対応の綱渡りで2年7ヶ月を持ちこたえた。

③発達するお母さん

1998年（千代野さん51歳）頃より、病状が安定し、昔の保母の感覚が戻り、施設職員気取りでお年寄りの車いすをおしたり、保母時代のメロディーを口ずさみ、「歌のうまい千代野さん」となっていった。毎日の食事も家族と一緒のためか食欲も進んで体重も健常時までに戻った。また、元気な頃の趣味の歌やお花また習字も回復していった。ひらがな、漢字と少しずつ読み書きができていった。とりわけ、夫秀信さんと映画にいくと、映画館でみんなが感動するところでは大きく声を出したり、泣いたり、笑ったりした。夫は、妻の日々回復、発達する感受性に共感する。そのことがまた、大きく妻千代野さんの発達を促進させると言えよう。

④残る障害

千代野さんの基本的人間性は豊かで素晴らしい。我々と同じ人格発達をしているといえよう。しかし、若年性認知症の高次機能障害があることも事実であり、いくつかの介護（移動などの身体介護は不必要）が必要である。障害は以下の3点である。

（イ）記憶喪失の逆行性

夫を一番びっくりさせたのは、回復期であるが医師の『氏名は？』との質問に千代野さんは旧制の「葉狩千代野」と堂々と言ったことなどである。この時、秀信さんは夫婦生活20数年は何であったかと失望したとのことである。これは、脳障害の回復過程において古い記憶から回復する逆行性の原則（一般的には新しい方が記憶しやすい）である。私がかつて頭部外傷後遺症の研究をした時（交通事故での場合が多

かったが）在日朝鮮人の患者の記憶回復では、若いときに使っていた朝鮮語から回復していき、最後に日本語がでてくるケースを多く経験した事を思い出す。

（ロ）着衣失行

千代野さんは今でも排泄介助、入浴介助が必要であり、裸、着衣の感覚がないようである。今でもトイレ、プールなどは夫の介助が必要である。私たちと食事を共にしていても、千代野さんのトイレになると必ず夫がトイレに入って着脱の一部介助をする。ただし、長女（同性）がすることを嫌う特性がある。

（ハ）幼児性

富田秀信著『子どもになった母さん』に代表されるように、子どもっぽい行動（退行といえよう）が今日まで残っている。先日、天王寺で富田夫妻ともう一人を時間待ちしていた時のこと、（千代野さんは待つ事が苦手でイライラする）「お父さん、マダカ？」を連発する。そのうちに近くにある食べ物屋を覗き、「お父さんアイスキャンデー買って」といい、しばらくすると「おとうさん、ジュース」とねだっている。

また、前述したように千代野さんの喜怒哀楽は少女のように豊かであるが、恥ずかしいといった感性が弱い。「人前では」といった大人の感覚に欠ける。夫がときどき注意するとショボンとする。注意されて始めて分かるといった幼児性がある。

自我心理学的にいえば現実吟味（reality testing）が弱いといえよう。

以上のような特徴をもつ千代野さんの人格を心理学的に分析してみようとロールシャッハ・テストの心理テストを実施した。

3、千代野さんのロールシャッハ・テスト反応

ロールシャッハ・テストはスイスの精神科医ヘルマン・ロールシャッハが作り出した精神診断学のための心理テスト法で、図1に示すように10枚のカード（図Ⅱ、Ⅲはレッドカード、図Ⅷ、Ⅸ、Ⅹはパステルカラーを含む）への被検者の反応（統覚）から投映法による（被検者の心が映る）方法論で被検者の精神を分析するものである。

図Ⅰ　ロールシャッハ・テスト図版（Ⅰ）

ヘルマン・ロールシャッハの原著（注3）の中で、すでに症例として、「老人性痴呆」を取り上げ分析を加えている。78歳の男性で3年来の「老人性痴呆」での特徴を以下の様にあげている。

①テストは数日かけて施行し、反応は13（？）であった。反応には固執傾向が強い。

②反応内容のM（人間運動反応）はゼロ、H（人間反応）もゼロであった。

③7、8歳の児童にみられる反応、即ち植物（花）の反応が多くみられる。

ヘルマン・ロールシャッハは痴呆を器質的精神病群の一例として取り扱っているが、その後の研究（注4）で、器質精神病のサイン（反応）についての研究が多くされている。

第一回の千代野さんのロールシャッハ・テストは、2001年7月20日千代野さんの自宅で施行した。施行者は筆者である。

R（反応数）：7、W（全体反応）：5、D（部分反応）：2　決定因はF（形体）：7、
反応内容は人間が見られない。

表1　富田千代野さんのロールシャッハ・テスト反応

図　　版	時間(秒)	方　　向	反　　応	
Ⅰ	5	∧	わからん　わからん	Rej
Ⅱ	30	∧	わからん　おしり　ここのところ	D　F　Hd　P
Ⅲ-1	5	∧	人が二人、立っている	W　M　H
Ⅲ-2	15	∧	道があって人が見合っている	W　M　H
Ⅳ	60	∧	わからん	Rej
Ⅴ	20	∧	わからん　鳥が羽をひろげている	W　F　A
Ⅵ	15	∧	おしっこしている　人が	W　M　H
Ⅶ	5	∧	人が見合っている	W　M　H　P
Ⅷ	5	∧	おしり　人の	W　F　H
Ⅸ	40	∧	わからない　わからない	Rej
Ⅹ	30	∧	わからない　きれいな色	W　C　Abst

LIKE CARD　　Ⅹ
DISLIKE CARD　　Ⅳ

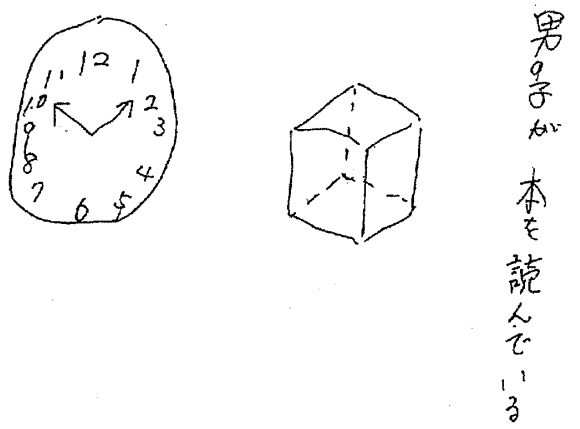
＜スコアリング＞
R：8　　Rej：3（Ⅰ、Ⅳ、Ⅸ）
M：4　　C：1　　F：3
H：6　　A：1

好きなカード（Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ－パステルカラーカード）　嫌いなカード（Ⅳ）

＜解釈＞　総反応数7で、「わからん」といった反応で、統覚力、投射力の低下が見られ、気質体の障害自我力の低下が認められるが、回復すれば、反応数が増加することが考えられる。パステルカラーカードの好きなカードから見て、情緒面の力は保持されている。その他の被検者の内面についての分析は反応数が少ないので分析するに至らなかった。

この時、同時に行ったN式精神機能検査所見では得点合計65点（100点満点中）、軽度の認知症と診断される。質的にみると言語性知能（逆唱・文字再生・時計の読取り）は保持されている。全体として記憶（記銘再生）の障害が認められる。（図Ⅱ参照）

図Ⅱ　千代野さんの図形・文字の再生例（2001年）



今回のロールシャッハ・テストの千代野さんへの施行は2004年8月29日(第一回目の3年後)多少ゆったりと時間をとって行われた。施行者は前回同様、筆者である。反応は表1のとおりである

＜解釈＞

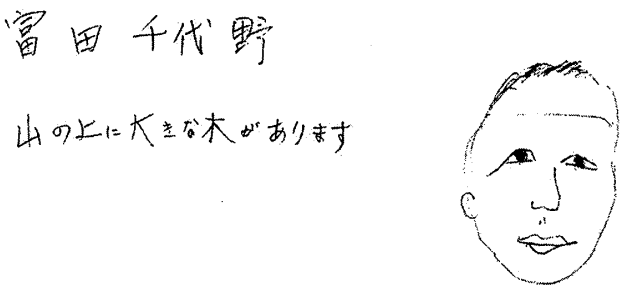
前回（3年前）に比べて反応数が増えるとともにM（人間反応）が4と自我力の強さを示している。しかしRej（拒否）？？？「わからん」といった反応も多く、M（気質的）にみると力強さが認められず、痴呆の反応を示しているといえよう。パステルカラーカードへの反応は良く、情緒面の豊かさを示していると言えよう。

全体としてM：4に示されるように、自我力の強さに示され回復・発達が認められ、Self Controlの力が出てきていると言えよう。千代野さんの幼児性は図Xの反応に示されていると言えよう。

しかし、R：8で「わからん」の連発で反応語も少ないことから、ロールシャッハ・テストから千代野さんの人格の多くを語る事ができないと言えよう。

同時に施行した、文章の再生、名前、夫の似顔絵を図Ⅲに示しておく。

図Ⅲ　千代野さんの読話再生と夫の似顔絵(2004年)



4、千代野さんの生活と家庭介護

千代野さんは1週間の月～金の昼間はデイケアセンターに通所している。送り迎えはヘルパーさんに頼んでいる。秀信さんは寝ている千代野さんを気にして朝5時に出勤、夕方5時に帰宅、千代野さんの世話をヘルパーさんから交代する。それから秀信さんは、食事、洗濯、掃除などの家事のすべてと、投薬、土日の入浴介助などである。千代野さんは健康で、月に1回の健康診断でも医師からは、体重80kgで、太りすぎという以外何も言われていない。しかし、千代野さんを一人にしておくことはできない。常に見守りの介助が必要であるので，勤めながらの介護はいまも家族にとってまさに綱渡りである。

千代野さんの楽しみは何と言っても食べることである。この点からも「子どもに戻ったお母さん」といえる。

もう一つは歌う事、音楽を楽しむ事である。発病以前の人生で，最も輝いていた時代に獲得した能力は今も保持されている。テレビも音楽の番組の時は観るが、他は関心を示さない。

もう一つの楽しみは水泳で、月曜日1時間泳ぐ事を秀信さんの付き添いで行う。これはかって育った海で学び楽しんだ時の力が生きている。字も書けるし、新聞や本も読めるが、意味がわからない。風呂の温度さえもわからない。この点、千代野さんには高次脳障害としての失行、失認がみられる。前述した着衣失行もこれであり、これらの点では介護での注意が求められる。

思考や記憶の弱さは、ロールシャッハ・テストの時にやった、「若年認知症のふるい分け検査」(厚生労働省若年痴呆研究班作成（注6））の1項目にある「今日は何年何月何日？」「今いるこの場所は？」「誰と話していますか？」質問に千代野さんは答えられない。時間的空間的集団的オリエンテーションの弱さと言えよう。

しかし「お母さん今日行ったとこは？毎月25日に賑わうとこやで」と夫秀信さんが言うと即座に「天神さん」と答え、さらに「何天神

さん？」と聞くと、「北野天神さん」と正確に記憶している。過去の記憶を手掛かりにしての会話と介護が求められる。夫秀信さんならではの介護だが、デイケアのヘルパーさんにもこの点のコツを伝えておくことが必要である。

5、若年性痴呆と地域の発達

旧厚生省の1996年の調査で、国内の45～64歳のいわゆる若年性認知症の人数は、推計で2万3千人といわれている。65歳以上の高齢者の痴呆と区別して社会的に問題になっている。
40代や50代の働き盛りの夫、妻が痴呆になる事によって、経済的、家庭的支援を失うということの上に、介護の問題が重なってくるので、家族は大変な状況になる。奈良や大阪では、「若年性痴呆の家族の会」が独自に作られている。

医学的には、専門用語としては初老期認知症（20、30代は含まない）とも言われている。原因症状別には（イ）アルツハイマー病（ロ）脳血管障害（脳卒中）（ハ）ピック病とに分けられるが千代野さんの場合は（ロ）脳血管障害に属すると言えよう。若年性認知症は働き盛りの人生を中断され、経済的、社会的に問題があるにもかかわらず、福祉面での谷間であるので、富田さんの家族の様にその矛盾は大きく家族全体にのしかかってくる。

これらの矛盾をどう克服していったかについては富田秀信氏の著書に詳しく述べられているが家族づくり、地域づくりが重要である。秀信さんは、その地域づくりのポイントを４点上げている。

（１）発病以前につちかってきた富田夫妻の人間関係が介護の財産となる（組合運動などの繋がり）。

（２）秀信さんは千代野さん発病後、千代野さんを地域の人々に隠すのでなく、積極的に訴え、その介護についての援助（ボランティア）を求め続けている。

（３）また秀信さんは千代野さんのことを新聞に投書して社会に訴えて、それをまとめる形で前述した著書『子どもになった母さん－仕事と妻の介護は綱わたり－』が出版され、社会に訴えるとともに支援を求めていった。

（４）千代野さんは外出する時、胸に必ず「障害者です。ご協力下さい。富田千代野」というプレート」を付けている。交通機関などでもこのプレートのおかげで早く、正しく認知してくれるのか、スッと席を譲ってくれることである。

また、街を歩いている時でも、かつての保育園関係者から「あら、富田先生お元気になられましたか？」の声がかかったりする。町の人々に認知されている、即ち地域づくり、地域の人々の発達の引き金になるといえる。

千代野さんが地域に積極的に出て、地域を発達させる事によってノーマライゼーションが可となると言えよう。さらに、千代野さんは秀信さんの協力でホノルルマラソンに参加したり、平和の使者として、ベトナムやカンボジアを訪問して国際的な活動を通して、広く地域の発達のための活動を積極的に行っている。

（追記）この論文中、富田秀信氏、千代野さんを実名で記した事についてはこの論文全文を見ていただき本人からの了承を得ている。

文献と注

（注１）　富田秀信編著『子どもになった母さん－仕事と妻の介護は綱わたり－』2004年発行、文理閣出版、なおこの書の第３部で、筆者も『中途障害者を乗り越える発達』の項を分担出筆している。

なお、富田秀信氏は藤本文朗他編『働き盛りの男が介護をするとき』2002年発行、文理閣出版、で分担執筆し、千代野さんの介護につい

てまとめている。

（注２）　N.Kapur(ed)、Injured Brain of Medical Minds View From Within,OXFORD UNIVERSITY PRESS, 1997

（注３）　Hermann Rorschach, Psychodiagnostik (1921) 訳『精神診断学』 牧書店　1958

（注４）　片口安史『新心理学診断法』 金子書店　2003年

（注５）　田村智恵子『これからの介護と技術』文理閣 2001年　P 72－73参照

（注６）　その他の問題として、船・山・犬・川・森・夜・自転車の再生、「か」で始まる言葉（30秒で７個）79356、49862の逆唱

（ふじもと　ぶんろう　本学教授）